

グリーンピックス

北海道立林業試験場

No.38

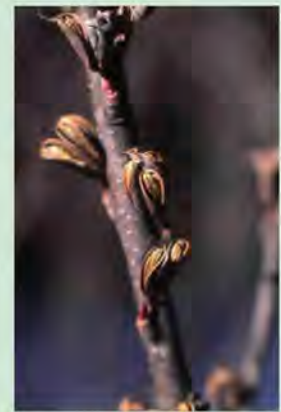
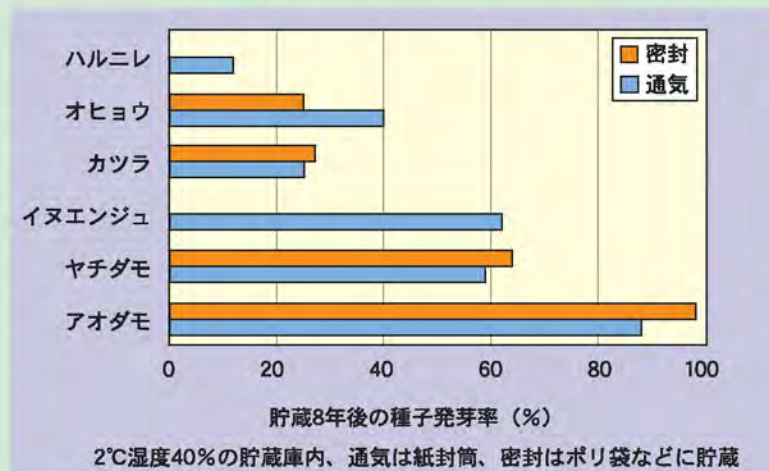
郷土樹種の種子貯蔵

地域住民による自然再生活動などの高まりにともない、多様な郷土樹種による森づくりが全国各地で行われるようになりました。その際、使用する苗木をつくるためにまず種子(タネ)が必要になりますが、できれば現場の環境に適した地元の種子を利用すべきです。広い北海道では同じ樹種でも積雪や寒風に対する耐性などに産地間差がある場合もあるからです。しかし、樹種によっては実に豊凶があるため、同じ地域で毎年種子が採れるとは限りません。ブナやアオダモのように5年に1度くらいの周期で豊作となる樹種もあるので、採取した種子を長く貯蔵できれば、苗木を毎年つくることができます。

そこで、1997年に河畔に生える広葉樹を中心に6樹種の種子を採取し、室内で数日自然乾燥した後、紙封筒やポリ袋、フィルムケースなどに入れ、2℃湿度40%の冷蔵庫で貯蔵を開始しました。その結果、各樹種とも5年目までは半分以上が発芽し、8年後でもアオダモは8割以上、ヤチダモ、イヌエンジュは約6割、オヒョウ、カツラは3割前後、ハルニレは約1割が発芽しました。また、ハルニレやオヒョウ、イヌエンジュではポリ袋などに密封すると生存に悪影響が出ることも明らかになりました。

2℃という温度は家庭用冷蔵庫のチルド室に近い温度なので、カツラやアオダモのように密封しても影響がないものでは同様に保存できるでしょう。ただし冷蔵庫内は比較的乾燥するため紙封筒での保存の場合、湿度に注意が必要かもしれません。

針葉樹やカンバ類、ヤナギ類、ブナなどでは氷点下での貯蔵も行われており、今後は生存期間を延ばすため、より低温の冷凍庫での貯蔵も試してみる価値がありそうです。(流域保全科)



カツラの袋果
(中に翼果が詰まっている)



種子の貯蔵状況
(フィルムケースはイヌエンジュとアオダモ)



貯蔵8年後の種子の発芽状況
(上段:アオダモ, 下段:イヌエンジュ)